

皇太子殿下 (財)新日鉄文化財団主催公演にご臨席

「ヴィオラスペース2005」～リトアニアの作曲家・バルカウスカス氏を招いて

2005年5月29日、皇太子殿下は(財)新日鉄文化財団およびテレビマンユニオン主催の「ヴィオラスペース2005」公演にご臨席された。今回の公演では、リトアニアの作曲家ヴィータウタス・バルカウスカス氏を招き、ヴィオラスペース初の試みであるプレ・トークを行ったほか、『二重協奏曲』の日本初演など、ますます充実したプログラム内容となった。



皇太子殿下(中央) リトアニア共和国大使 アルギルダス・クジス氏(左)
テレビマンユニオン代表取締役会長兼CEO 重延浩氏(右)



皇太子殿下を先導する内田耕造 新日鉄文化財団
常務理事(新日鉄取締役)

『二重協奏曲』は、バルカウスカス氏が、戦時中ナチス・ドイツに追われるユダヤ人に自らの危険をかえりみず日本通過のビザを発給し6,000人の命を救った外交官の故・杉原千畝氏夫妻に捧げた曲。

バルカウスカス氏は、杉原氏が1940年当時赴任していたリトアニア共和国・カウナスの出身で、その人道的な行為に深く感銘しての日本初演となった。

昨年のリトアニアでの世界初演にも参加した世界的ヴィオラ奏者の今井信子さんは、引き続き日本初演となった今回、「紀尾井ホールで若い方々と一緒に演奏ができ、皆様に喜んでいただけて幸せでした」と語る。

曲中では日本古謡「さくらさくら」のメロディが取り入れられ、最終楽章では和太鼓をイメージしたパーカッションの連打がヒューマンイズムの勝利を表現する。その大迫力に約700名の聴衆は息を飲み、演奏後盛大な拍手を送った。

当日は杉原千畝氏の親族の方も来場し、感動を共にした。

2003年に引き続き、ヴィオラスペースにご臨席された皇太子殿下は、演奏を味わい、ホールへの響きにも満足され楽しまれたご様子であった。

リトアニアと日本の架け橋となった 「ヴィオラスペース」

昨年からは開始したマチネ・ミニ・コンサートに加え、初めての大阪公演も実施し、初登場のレーパトリも増えてますます充実した「ヴィオラスペース2005」。

特に今回は、2日間の紀尾井ホール公演においてリトアニアの作曲家ヴィータウタス・バルカウスカス氏を招き、開演前にプレ・トークを実施し、28日に世界初演となる『2つのモノローグ』、日本初演となる『ヴァイオリンとヴィオラのための二重協奏曲(以下、二重協奏曲)』が演奏された。



プレ・トークの様子



演奏終了後、盛大な拍手に包まれた

ヴィオラスペース

ヴィオラスペースは今井信子さんを中心に、これまで独奏楽器として取り上げられることが少なかったヴィオラの魅力を世界へ向けて発信する企画として、1992年にスタートした。「ヴィオラ礼讃」「ヴィオラ作品の紹介と新曲委嘱」「若手の育成」を3つの柱に、日本を代表するヴィオラ奏者たちが創造的な挑戦を繰り返す。2003年からは、主催の一翼を担っていたカザルスホールに代わり、紀尾井ホールへと活動の場が移った。オリジナリティ溢れるコンサートで、日本の音楽界の発展に大きく貢献している。

杉原千畝(1900-1986)：昭和期の外交官。元・リトアニア共和国カウナス領事館副領事。本省命令を無視してナチス・ドイツから逃れる約6,000人のユダヤ人難民にビザを発給し続けた。訓令無視により外務省を辞めさせられるが1991年に44年ぶりに名誉回復した。1966年、イスラエルに招待され、多くのユダヤ人の生命の恩人として勲章を授与されたほか、数々の賞を受賞。